

夏の日

K・暁夏

私は、四十歳の夏に乳癌になりました。乳癌と診断される半年くらい前から、左胸に違和感を感じ、近くの総合病院の外科を受診したところ、乳腺症と診断されました。半年ぐらいようすをみて、治らないようだったらまた来て、と言われたので、ようすをみていたら、時間がたつにつれ、胸全体のはりや、さわるとヒリヒリするような痛みはおさまってきたのですが、左胸の上の方、脇の下の近くに、小さなしこりができたのに気づきました。それは、豆粒ほどの大きさで、押すとコロコロ動きました。乳癌、この二文字が私の頭をかすめました。なぜなら、祖母が乳癌で亡くなっているからです。祖母は、六十代で癌になり、十年以上の闘病の末、亡くなりました。優しく、活発だった祖母。夏は、絹の着物を取りゅうと着て、紗のストールをはおり、街を歩いていた祖母。編み物や、ビーズ手芸が得意だった祖母。こぼれるような花がきらめくビーズでできた絵画は、祖母の根気の賜物でした。花の絵が好きだった祖母は、黄色い灯りのような福寿草やクロッカス、つくし、たんぽぽを次々とスケッチし、岩絵の具で淡く色彩していました。そんな祖母が、乳癌になったのは、利き手がある右側でした。最初見つけた時は、ほんの小さな針の穴ほどのしこりだった、と言っていた祖母。けれど最初の手術の時から七年ほどたつて再発し、徐々に弱っていきました。祖母は、痛む右側を庇いながら、それでも絵を描いていました。光を集めたようなひまわりや椿たち。祖母の色使いは大胆になり、線は勢いを増しました。「もう時間がないからね」

それが、祖母の口癖になりました。ベッドに寝ている時間が長くなっても、祖母は、ほんの少し起きあがれるわずかな時間で、病室に飾られた花たちを描き続けていました。岩絵の具は、扱いの便利な色鉛筆にかわり、握りやすいように、鉛筆の下の部分に布を巻きつけて太くしていました。やがて、手に震えがきて、線さえ覚束なくなっても、祖母は、描き続けていました。祖母が描き続けた花たちは、その香りさえ消えずに写しとられてゆくようでした。

ある時、お見舞いに行くと、祖母は、「六尺にも満たないねえ」と、笑って言いました。美しいものが好きだった祖母。自分の回りを粹な色でしつらえ、自分も美しいものを描き続けた祖母。祖母は、美しいままに亡くなってゆきました。

祖母の命を奪ったのは乳癌でしたが、癌は祖母の矜持までもは奪えませんでした。

それでも、癌でない方がいいに決まっています。それに、私は、まだ四十歳。下の子は小学三年生になったばかり。毎日、泥だらけになってサッカーボールを追っているやんちゃ

な男の子です。もし癌だったら、全ての生活がひっくり返ってしまいます。私は、こわくなって、病院に行くことができなくなってしまいました。日々は、流れるように過ぎてゆきます。参観日、サッカー少年団の送り迎え。宿題の算数をみることに。からあげが好きな勇斗のためのごはんしたく。どうか、癌ではありませんように。いや、癌であるはずがありません。まだ四十歳。癌は、祖母のように、子育てが終わり、趣味に生きる余裕のある人がかかる病気です。今、今であるはずがありません。それでも、あえて触らないようにしているうちに、小さかったしこりは存在感を増し、少し固くなってきたようでした。

六月の、リラ冷えの日、私は、病院を受診する事を決意しました。今度は、電車に乗って一時間ほどの、乳腺の専門医がいる病院を受診しました。誰にも言わず、子供たちを学校に送りだしたあと、いそいで電車に乗りました。「いやあ、なんでもありませんよ。乳腺症が悪くなっただけです」と、医師が笑って話すのを期待して。

乳腺外来の担当医は若い研修医で、私の話を聞くと、奥からベテランの、おなかの大きな医師が現れて、二人で診察してくれました。

「これかな。これは、刺してみる価値あるかな。これから検査しますね。ここにちよつと針を刺して、中の物を吸いとって検査しますから。気になるのはここだけですか？ 違うな。ちよつと離れてるけど、ここにも小さいのがある。ここもとりますね。全部で二ヶ所。ちよつと痛いですよ。すぐすみすから」

吸引細胞診、という検査が行われました。ほんの少しの痛みと、これで、何かがわかるという安堵感。私は、目を閉じました。

「もういいですよ。終わりました。一週間後また来て下さい。結果をお話しします」
私は、「ありがとうございます」と、一礼して診察室を出ました。そして、会計を終えると、いそいで電車に乗りました。家につくと、朝、出かけたままの茶碗をかたづけ、たきこみご飯の準備をしました。ごぼうをさがきにし、水に放つと、アクが流れていきます。こんな風に、もし悪いものがあるなら、流れていけばいいのに、と、思いました。

一週間後、検査結果を聞きに病院へ行きました。結果は悪性でした。その日のうちに、肝臓のCTを受けました。転移は、ありませんでした。手術をすすめられ、私は、一番近い日をお願いしました。一ヶ月もすると、夏休みがやってきて、子供たちだけで、家で大半の時間を過ごさなければならなくなるからです。七月一日、入院、二日が手術と決まりました。癌だった。どうしよう、という思いが頭を駆けめぐりました。電車にさしこむ日差しはあつく、迫りくる夏休みを予感させました。入院までの一週間、すべきことは山のようにありました。夏用の衣類をだしたり、冷凍食品をストックしたり、日用品を整理したりしました。そして、髪を切りました。勇斗が、「モンチッチみたいだね。お母さん」と、言いました。短くなった髪を、高くなった日差しが照りつけていました。

勇斗に、「ちょっと悪いところをとらなきゃいけないから、少し入院するね。すぐ帰ってくるから」と、大好きなゴレンジャーのテレビを見て、上機嫌な時に、何気ない調子で話しました。勇斗は、すかさず、

「サッカーの試合、応援にこれなの？ お弁当は誰がつくるの？ お父さんは、卵焼きつくれないよ。お姉ちゃんがつくってくれるの？」

「お姉ちゃんにも頼んでおくれ、冷凍食品もあるから大丈夫だよ。お母さん、すぐ帰ってくるからね。帰って、勇斗のお弁当つくるからね」

「すぐだね。すぐ帰ってね」

「大丈夫。すぐ帰ってくるよ」

私は、二週間分の荷物をボストンバッグに入れて、窓側のベッドに入院しました。薄く白いカーテンを透って入る日差しは、すでに夏のそれで、一日もはやく帰って、子供たちに夏を満喫させなければ、と思いました。夕方、麻酔の医師せんせいの面談があつて、翌日の一時に手術室に入りました。手術室のスタッフが用意してくれたポップスが流れていて、リゾート気分のメロディーが、手術室の白い室内を、南国の白い砂浜に変えていました。誰がこの曲を用意したんだろう、と思っているうちに眠りに落ちて、気がつくと個室のベッドで呼びかける声に返答していました。夫の顔が見えました。

「どうしているの？ 来なくていいって言ったのに。勇斗は？ 勇斗は一人なの？」

私は、手をふって、夫に帰るように促しました。夫は、私の手を握り、

「お姉ちゃんが勇斗をみてくれてるよ」

と言いました。

「お姉ちゃんは、部活があるよね。休ませちゃダメだよ。最後の夏なんだから。こっちは来なくていいから、すぐ帰って勇斗のそばにいてあげて」

夫は、困ったように笑い、

「とにかく終わって良かったね」

と言いました。

「ありがとう。でも、帰ってね。ここは、看護師さんがいるから大丈夫だから。いても、お父さんにはすることもないよ」

「わかったわかった」

夫は、ベッド横の丸椅子から立ち上がり、帰りました。麻酔からうすくさめた意識の中で、中学三年の部活と勉強のうちこむはずの時間を、勇斗の世話に費やしてしまっているお姉ちゃんを思いました。病気は、時を選びません。それは、仕方のない事です。それでも、お姉ちゃんを受験を控えた今でなければ良かったのに、と、私は、斜めを向いているモニター画面の光を瞼の裏に感じながら、思いました。

胸を圧迫する包帯から、管が二本、ベッド下に向かって伸びていました。そこに、陰圧のプラスチックボトルがあって、血液を吸引していました。看護師さんが、そのボトルを交換する時に、

「この管がとれたら、お風呂に入れるけれど、それ迄は、毎日、体をふくタオルを持ってくるから、それでふいてね」

と、説明してくれました。私は、流れる血を眺め、透き通るような赤色だと思いました。

翌日、個室から大部屋にうつりました。大部屋といっても、四人部屋で、ベッド間隔は広くとってありました。夫が用意してくれたCDをイヤホンで聞いて、読みたかった小説を読み、子供達に手紙を書いて過ごしました。一週間ほどで、血液が少なくなり、管がぬけると説明を受けた筈でしたが、私の出血はとまらず、逆に増えていきました。私は、食べても体重が増えず、疲れやすくなりました。ある日、医長先生の診察があつて、

「傷のつきぐあいが悪いようだし、吸引しきれない血液が背中にたまってきたから、もう一度、麻酔をかけて傷を開き、たまった血液をぬいてから、傷をとじる、という方法があるけれど、再手術してみてもどうか」と、話がありました。私は、もう一度傷を開くとなると、さらに入院日数がのびるのではないかと思ひ、このまま吸引しようすをみて頂けたら、と、お願いしました。医長先生は、頷き、吸引のスピードがあがるように、胸帯をきつく巻いて、夜を過ごしました。そうやって、三日程たったある日、突然、熱が上がり三十八度になりました。抗生物質の点滴を受けると、とたんに熱は下り、胸が圧迫されたように苦しくなりました。そのことを、看護師さんに言うと、胸帯をほどいて、手術した胸を確認してくれました。胸の毛穴からふきでたような粉が、全面に浮いていました。看護師さんは、それをガーゼにとつて、詰所にもつていきました。その二時間後、担当の医師が、ベッドサイドに器具の入った台を押してやってきて、

「感染して膿がたまつてるようだから、切開して膿をだします」

と、言つて、抜糸間近の皮膚にメスを入れました。メスが入ったとたん、白いドロドロした液体が胸の奥からわき出るように排出され、さらに医師が、細い器具を挿入して、中の膿をかきだすと、奥の下の方から赤黒い血の塊がぷりんのようにかきだされました。そのとたん、胸をおしていた圧迫感が消え何かから解放されたようにスッキリしました。そして、もう一度管を入れ、縫合しました。私は、カレンダーを見て、また、ふりだしに戻った事を悟りました。もう、七月も半ばを過ぎています。あと、四日程で夏休みが始まります。本当なら、明日か明後日に退院する筈でした。私は、夏を楽しみにしている勇斗のことを思いました。家事と勇斗の世話にあけくれている、夫とお姉ちゃんの事を思いました。

「負けちゃったよ。インターハイ」

お姉ちゃんは、さみしそうに言いました。

「でも、大丈夫。気もちきりかえて、今度は勉強するよ」

負けず嫌いの勇斗は、母ちゃんなんていなくても平気だ、と、一人で、納豆ごはんをかきこんで、サッカー場へ駆けだしていくそうです。

「ごめんね。夏休みまでには帰れそうにないよ」

「気にするな。ゆつくり休めよ。こっちの方は、みんなちゃんとやってるから」

夫は、疲れた声で、それでも何気なく答えました。管がぬけないまま、夏休みを迎えました。部活を引退したお姉ちゃんが、家のことを一手にひきうけてくれて、なんとか家は回っているようでした。それでも、週に三日あるサッカーの練習が休みの時は、勇斗が家でさみしさをもて余しているだろうと思い、電話すると、勇斗が、

「お母さん、帰ってきて。お姉ちゃんのごはんおいしくないよ。帰ってきて。すぐ帰ってきて」

と、最後は涙声で、吐きだすように言いました。

私は、なんとか外出許可をとれるようになると、電車に乗って我が家へ向かいました。鍵をあけて、「ちょっと帰ってきたよ。お母さんだよ」と、言って、家に入ると、勇斗が、居間のソファで呆然とテレビを見ていました。

「お母さんだよ。お母さんだよ、お母さんだよ」

勇斗は、はじめたように抱きついてきました。手術した左胸を庇うようにして、勇斗を受けとめました。勇斗のあつい躰が、厚く巻いた胸帯ごしに伝わってきました。

「お姉ちゃん？」

「お姉ちゃんは、塾に行ったよ。夏期講習」

「勇斗、テレビばかり見ちゃダメだよ」

「だってさみしいんだもん。誰かきたら怖いからピンポン聞こえないようにテレビつけてるんだ」

「そうだね。さみしいもんね。勇斗、家の中だけど、ちょっとサッカーしようか。お母さん、ボール転がすから、キックして」

「わかった」

「じゃ、やるよ」

勇斗は、ボールを止め、正確に返してよこしました。それが終わると、私は、ボールを浮かせて、躰でボールを止めるように言いました。子供たちが遊べるように、襖を開けると寝室まで一体になる広い空間の一階は、多少ボールを浮かせても、窓ガラスをこわす心配はありませんでした。勇斗は、得意そうに空中でボールを受けとめました。その夏は、記録的な猛暑で、私たちは、とたんに汗ばんで水を浮かべた水をゴクゴクと飲み干しました。高かった太陽が、少し斜めになり、帰りの電車の時間になりました。

「勇斗、もう帰る時間だから。また来るね」

そう言うと、勇斗は、抱きついてきて、

「もう帰るの？ ずっと家にいてよ。お母さんじゃなきやダメなんだ。お母さん、帰っちゃダメだよ。僕、また一人になっちゃうよ」

「ごめんね。勇斗。今度は、ちゃんと治して帰るからね。そしたらずっと、勇斗といっしょだよ」

私は、勇斗をぎゅっと抱きしめました。子供の額から、ひなたの匂いがたちのぼるようでした。それから一週間程して、順調に血液も減り、管が抜かれました。ずいぶん長期間、管が入っていたために、管が挿入されていた皮膚が黒ずんではいましたが、管のない生活は快適そのものでした。そして、退院。夫に迎えに来てもらって、家に帰ると、勇斗が、

「長かったあ。おそいよお」と、抱きついてきました。

「夏休み、終わっちゃうよ。お母さん、海、行きたいよ。山もキャンプも、プールも行きたい。お母さんのコロッケ食べたい。からあげも。次の試合、応援してよ。絶対だよ」

私は、勇斗を抱きしめました。そして、「ありがとう、長い間ごめんね」と、お姉ちゃんに声をかけました。大人しいお姉ちゃんは「お母さん、無理しないで早くよくなつてね」と言っていて、洗濯物をとりこんでくれました。その日は、退院祝いにお蕎麦を食べに行きました。お蕎麦の冷たさといっしょに幸せが胸いっぱい広がりました。

退院の三日前に医師せんせいから聞いた、五年生存率六十八パーセントという数字は、夏の煌めきといっしょにどこかへ行ってしまうました。